

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0290100171		
法人名	医療法人 蛭慈会		
事業所名	グループホーム港町		
所在地	青森市港町2丁目15-29		
自己評価作成日	平成25年12月10日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 青森県社会福祉協議会		
所在地	青森県青森市中央3丁目20番30号		
訪問調査日	平成26年1月29日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

法人医師による往診の他、日・祝祭日・夜間を問わず、24時間、入居者の緊急時に対応可能な体制を整え、医師・看護師・介護職員が一丸となり、ターミナルケアを行えるよう取り組んでいる。セラピードッグが認知症ケアはもとより、近隣住民との交流に役かっている。また、地域の一人として、町内ねぶたや町内清掃に積極的に参加し、今年度は認知症サポーター養成講座へ参加させていただき、「物忘れと認知症の違い」を住民に伝えることができた。今後も活動内容を広げ、認知症への理解を求めていきたい。  
入居者のできる事は奪わず、できない事を強要せず、一人ひとりに合わせたケアを提供できるよう「さりげないケア」に取り組んでいる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

母体施設の医療機関と24時間体制で連携が図られ、重度化や看取りに関する指針を明確にして、全職員が不安なく支援に取り組むことができるよう、体制を整えている。  
認知症ケアの一端として導入されたセラピードッグは、利用者のみならず、職員の癒しにもなっており、笑いを誘い、ホーム全体の空気を暖かいものにしていく。また、セラピードッグとの散歩が近隣住民との会話のきっかけづくりにもなっている。  
職員は地域との関わりや職員同士の関係を大切に、利用者が自分らしく、生き生きと穏やかに暮らせるよう、心をつなげて日々のケアに取り組んでいる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

## 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	施設内に事業所独自の理念「地域の中で自分らしくいきいきと」を掲示している。地域との関わりの重要性を理解し、意識しながらのサービス提供を心がけている。	開設時、管理者及び職員で話し合い、「地域の中で自分らしくいきいきと」という独自の理念を作成し、玄関・ホール・事務室に掲示して共有化を図っている。管理者及び職員は地域住民との交流を大切に考え、日々、理念に沿ったケアの実践を心がけている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会に加入し、回覧板に目を通して、地域生活に即した情報を得ている。町内ねぶたや町内清掃に、地域の一員として積極的に参加している他、避難訓練を事前に近隣住民に知らせ、理解を得ている。また、行事への参加の働きかけについても、チラシを配る軒数を前年より増やし、事業所前にも掲示したことで、参加者数や交流の機会が増えた。	ホームのセラピードッグの散歩が地域住民との会話のきっかけづくりとなり、顔馴染みが増えている。町内会の清掃活動やねぶた祭り、防災訓練等に積極的に参加して、地域住民との交流を深め、ホームのことを理解していただけるよう取り組んでいる。また、ホーム行事にも参加していただけるよう、地域住民に声かけする範囲を徐々に広げ、参加者も増加して、更に交流を深めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	中学生の職場体験の受け入れや近隣住民の行事参加、施設見学の案内時等、認知症を理解していただけるよう、実際に見てもらい、伝えている。認知症サポーター養成講座に参加し、「物忘れと認知症の違い」を講義と寸劇により、わかりやすく住民に説明し、好評を得ている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議では行事や日々の様子等を報告し、参加者の意見を得て、情報交換も行い、サービスの向上に活かしている。会議に参加する家族が増えるよう、積極的に参加を促す取り組みを行っている。	2ヶ月に1回、運営推進会議を開催しており、メンバーは会議の意義・役割を十分に理解している。会議では行事や防災に関する事等、それぞれの得意分野から様々な意見・提案が出され、今後のサービス向上に活かせるよう取り組んでいる。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議の報告書等の提出を確実に行うことで、現場の現状を伝え、協力関係が築けるよう努めている。	市には、2ヶ月に1回発行するホーム広報誌と運営推進会議の記録、自己及び外部評価結果等を提出し、ホームの実態を理解していただくよう働きかけている。また、必要な時は随時電話をしたり、訪問する等して、情報交換や相談等を行い、連携を図っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	外部研修への参加と内部研修の実施により、全職員が正しく理解できるように、マニュアルも整備している。身体拘束をしないケアを前提に取り組み、居室には鍵が取り付けられていない。日中は玄関に鍵をかけることはなく、入居者が自由に出入りできるようにしている。また、外出傾向を見逃さないように見守り、外出した際も止めることはせず、職員が付き添いを行っている。	マニュアルを整備すると共に、ホーム内・外の研修を利用して身体拘束について理解を深め、「身体拘束は行わない」という方針を全職員で共有し、ケアに取り組んでいる。職員同士で連携を図り、外出傾向の察知に努め、必要時は一緒に付き添って外出している他、無断外出時に備えて、地域住民に協力をお願いしている。また、やむを得ず身体拘束を行う場合に備え、家族の同意を得て、理由・方法・期間・経過観察等を記録に残す体制を整えている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	外部研修への参加と内部研修の実施により、全職員が正しく理解できるように、マニュアルを整備している。虐待や虐待に当たる行為を見逃すことがないように、職員間で注意し合える環境を作り、お互いのケアの場面を観察し合い、防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	グループホームの勉強会や外部研修に参加し、制度活用の機会に備えている。成年後見相談所との関わりがあるため、制度の利用希望者が出た場合にも、安心して支援できる体制がある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は重要事項説明書に基づいて丁寧に説明し、事業所ができる事とできない事、料金や重度化・看取りについて、また、料金改正の際にも十分な説明を詳しく行い、同意を得ている。退居に至る場合も家族と十分に話し合い、退居先の情報提供を行う等、不安を生じさせない対応に努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見や不満、苦情を出しやすいような雰囲気づくりを心がけている。意見箱の設置の他、家族に毎月発送している手紙に返信欄を設けている。上手く意見を伝えられない入居者の場合でも、何気ない表情や発語を見逃さないよう観察し、思いを汲み取るように努めている。また、出された意見等はすぐに話し合い、対応している。	日頃から、利用者との信頼関係の構築に努め、表情や言動からも意見等を察するように努めている。玄関に意見箱を設置すると共に、毎月家族に送付する利用者の近況報告の手紙には返信欄を設け、気軽に意見・要望を出していただけるよう工夫している。また、出された意見等については速やかに話し合い、全職員で共有し、今後のケアに反映させていく体制となっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日頃から、意見や提案を出しやすい雰囲気づくりを心がけ、コミュニケーションを図っている。ミーティングやカンファレンス等で、職員の意見や提案を聞く機会を必ず設け、その場で話し合い、運営に反映させている。	業務の中で疑問点等があれば、随時、職員同士で話し合ったり、管理者に話ができる環境であり、ミーティングやカンファレンスでも意見・情報の交換を行っている。また、職員のスキルアップ等のために異動が行われる場合には、利用者への影響や職員の希望に配慮して、検討をしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者が随時代表者に報告したり、代表者が直接現場に来る等して、職員の勤務状況を把握している。資格取得を勧め、応援する姿勢を示してくれるため、職員もやりがいや向上心が持てる環境となっている。また、年2回の健康診断を実施している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の力量や経験に応じた研修を受ける機会を確保するために、年間の研修計画を作成している。研修後は復命書を作成し、全職員が回覧している。また、内部研修を行い、日々のケアに活かしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	外部研修や東部包括支援センター圏域のグループホームが集まる勉強会に積極的に参加し、情報交換や意見交換を行い、更なるサービスの向上を目指している。		
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用開始前に必ず本人に会い、身体状況や思い、要望、不安等の把握に努めている。その際は本人と良好な信頼関係を築いていけるよう、意識して対応している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用の相談があった時には、家族からこれまでの経緯や現在困っている事、思いや要望等の話をじっくり聞くよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人や家族が必要としている事を見極めるように努めており、すぐに対応できる事に関しては、迅速に対応するよう努めている。すぐに対応できない事についても、必要に応じて、地域包括支援センターや関係機関と連絡を取り合い、対応している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員は入居者を人生の先輩として尊敬し、共に助け合いながら生活しているという意識を持っている。一人ひとりのできる事、できない事を見極め、日常的に家事や、植物・野菜の育て方を教えてもらいながら、一緒に作業をしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会の際や電話や手紙で、本人の日頃の様子や職員の対応等を、わかりやすく家族に伝えるようにしている。家族の心情に寄り添いながら、理解を得て、共に本人を支える関係を築けるよう努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居前より利用していた美容院に、継続して行けるよう支援している。親族や友人等、初めて面会に来られた方に、いつでも気軽に会いに来てほしい事を伝え、交流が継続するよう働きかけている。	入居時のアセスメントや入居後の日々の会話を通して、馴染みの人や場所を把握し、以前からの交流を継続できるよう支援している。家族・親戚・友人等との面会は自由に受け入れ、希望に応じて電話のやり取りをお手伝いしている他、美容院や買い物等、可能な限り、利用者が希望する場所に出かけられるよう支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の関係性を全職員が共有して把握し、家事作業や施設行事、レクリエーション等、皆で楽しく過ごす時間や気の合う者同士で過ごせる場面づくり・支援を行っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後も相談等に応じる姿勢や、これまで築いてきた関係が継続できるよう説明している。その結果、退居後も家族が本人を連れて来られ、関係性が継続している。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々のコミュニケーションや入居者同士の会話、家族からも情報を得て、意向の把握に努めている。把握することが困難な時には入居者の立場に立ち、考えるようにしている。また、入居者の表情からも思いを汲み取るように努めている。	日頃から、思いや希望、意向を話しやすいような雰囲気や心がけると共に、表情や言動等、多様な面から状況観察に努めている。また、全職員が連携して情報を共有し合い、必要に応じて、家族や面会に来た友人等からも情報が得られるよう、積極的に働きかけている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族からこれまでの生活歴や生活環境等を聞いたり、普段の何気ない会話や行動を観察し、把握に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの生活リズムを理解し、心身状況や生活の中のできる事、できない事等の把握に努め、小さな変化を見逃さないようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	可能な限り、本人に意見を聞いている。家族の意見も聞き入れ、カンファレンス等で職員間で話し合い、意見や気づきを反映させて、具体的な介護計画を作成している。心身状況の変化等があった時は再アセスメント・モニタリングも必ず行い、見直しを行っている。	日々のケアを通して利用者の意見を聞くよう心がけ、面会時等に家族からも意見を聞いている他、担当職員が中心となって職員間で話し合い、個別の計画を作成している。また、毎月モニタリングを行い、利用者の状況変化や家族の希望に応じて、必要時には随時見直しを行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別のケース記録に暮らしの様子や身体状況、表情や言葉、支援に対する反応等を具体的に記録するように努め、全職員が記録の内容を共有できるようにしている。また、介護計画の見直しにも活用できるように、サービス内容に沿った記録を心がけている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	看護師が配置されているため、医師と連携をとりながら、救急搬送や病院受診が必要かどうかの判断等、柔軟な対応をすることができる。また、入居者や家族からのニーズに応えられるよう、事業所ができる範囲で支援を行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	町内の「和の会」の訪問が毎年あり、手踊りを披露してくれている。今年は天候不良のため、町内ねぶたに入居者が参加することができなかったが、職員は例年通り、バケトやハネトで参加し、地域住民にも喜ばれていた。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	理事長である医師の往診が受けられるという安心と利便性から、家族や入居者の希望により、母体法人の医療機関にかかりつけ医が変更されている。これまでの受療状況を把握し、眼科や皮膚科等の受診の支援も、家族と協力して行っている。協力医である歯科の往診も受けている。また、入居者や家族の希望や受診結果、治療の方針等を、その都度、双方に伝える仲介役にもなっている。	入居時にこれまでの受療状況を把握すると共に、入居後の方針についても話し合い、希望する医療機関を受診できるよう支援する体制にあるが、殆どの利用者が法人の医療機関に変更している。眼科・皮膚科等の専門医受診が必要になった時は、家族の協力を得ながら、希望する受診ができるよう支援している。また、受診結果については、面会時や月1回の手紙で報告している他、定期受診でない場合等は随時、電話で報告している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師が配置されている。介護職員は身体状態の気付きや変化があった時は、随時伝える体制をとっている。医師の往診時の他、その都度、電話で医師や看護師に報告・相談できる体制も整えている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入居者が入院した際は病院に頻回に面会に行き、本人や家族、病院関係者と話し合いの機会を持ち、本人の状態や今後の方針等の確認を行っている。当事業所での受け入れや退院が可能と判断された時は、退院に向けて支援体制を整えている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取組んでいる	重度化や看取りに至った方はいないが、事業所としての指針を定めている。看取りについて、早い段階から家族、医師、職員、看護師を交えての話し合いを行い、法人の医療機関と連携してケアサポートできる体制を整えている。	重度化や看取りに関する指針を定め、ホームとしての方針を明確にしており、母体法人の医療機関との連携の下、対応が可能であることを利用者や家族に説明している。法人の看護師と日常的に相談できる関係を築き、状態の変化に応じて、随時、利用者、家族、医師、看護師と話し合いを行う体制となっている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	夜間緊急時の連絡・対応マニュアルを整備している。グループホームの勉強会や内部研修で、応急手当と基礎知識について学び、急変時や事故発生時に備えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、夜間を想定した火災による避難訓練を、入居者と一緒に行っている。出火場所は事前に知らせず、誘導職員が避難経路を瞬時に判断するようにしている。運営推進会議等で町会長に協力を得られるように働きかけているが、実現には至っていない。また、近隣住民に訓練があることを事前にお知らせをしている。災害発生時に備え、食料品の備蓄や停電対策も行っている。	年2回、夜間想定で避難訓練を行っている。また、職員が地域の防災訓練に参加し、津波等の災害時の避難場所を確認しており、いざという時に利用者をどのように避難させるか、地域住民と話し合い、協力をお願いしている。消火器やスプリンクラー等の防災設備は年2回、業者委託で点検し、非常時に備え、食料、飲料水、使い捨てカイロ等を備蓄している。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの人格を尊重し、言動を否定したり、拒否しない声かけや対応を心がけ、羞恥心やプライバシーにも十分に配慮し、より良い対応を話し合い、検討しながら支援している。入居時に写真掲載についての説明を行い、同意を得ている。	個々の人格を尊重し、声がけの仕方や言葉遣いには十分な注意を払い、利用者のペースに合わせたケアができるよう心がけている。写真掲載に関して入居時に説明し、同意を得た上で行っている他、個人情報に関する書類は、外部からの来訪者の目に触れないよう、事務室内に保管している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の中で、一人ひとりが思いや希望等を表したり、自分で決められるような場面を多く作っている。意思表示が十分にできない方には、表情の変化や反応を見逃さずに読み取るようにし、支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その日その時の心身状態や希望を確認しながら、できる限り、一人ひとりのペースに合わせた対応ができるよう心がけ、支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	馴染みの美容院に継続して行けるよう支援している。訪問理・美容サービスもあり、入居者や家族が希望した際に利用している。衣類や整容の乱れにはさり気ない声かけや対応を行い、化粧品を持っている入居者には、継続して化粧ができるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	年1回、嗜好調査を行っている他、毎日の食事摂取状態を観察し、一人ひとりの好み等の把握に努め、献立にも多く取り入れている。咀嚼や嚥下状態、アレルギーにも配慮し、一人ひとりに合わせて、工夫しながら提供している。調理や盛り付け、食事、片付けも、入居者と職員が会話を楽しみながら、一緒に行っている。	年1回の嗜好調査や日々の会話を通して利用者の好みを把握し、利用者一人ひとりの身体状況に合わせて、食事形態や調理方法等を工夫している。また、個々の能力や希望により、できる範囲で盛り付けや後片付け等を手伝っていただいている他、利用者が楽しく食事できるよう、職員は声かけしながら、必要なサポートを行っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	本人とも相談しながら、一人ひとりの状態に合わせた食事量を提供している。毎食の食事摂取量、毎月1～4回の体重測定を行い、チェック表に記入し、食事摂取量や体重の増減に注意している。様々な理由で常食や水分がスムーズに摂れない場合は、状態に合わせて工夫している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	グループホームの勉強会への参加と内部研修を行い、口腔ケアについて学び、ケアに役立てている。習慣になるよう、一人ひとりに合わせた口腔ケアの支援を継続し、居室で行われていた入居者がホールで行うようになった。口腔内を確認し、洗浄不足があれば、必要に応じた支援を行っている。義歯の消毒は週に1回以上行い、清潔保持に努めている。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	排泄表を活用し、排泄パターンの把握に努め、事前誘導を行うことで、失禁予防につなげるようにしている。失禁が改善されている時は布パンツに移行している。少しでも自立した排泄ができるよう、入居者や家族と話し合い、支援の程度や方法を共に考え、ベッドの位置も工夫している。プライバシーには特に配慮し、声がけや支援を行っている。	排泄チェック表に時間帯毎の排泄状況を記録し、個々の排泄パターンに合わせたトイレ誘導を行っている。日々の状況を観察し、オムツ使用の継続等を随時話し合い、利用者や家族の希望を聞きながら、排泄の自立に向けた支援を行っている。また、誘導時の声がけは周囲に気づかれないよう、配慮して支援に取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	下剤に頼らないよう、食事の工夫や水分摂取量に気をつけ、運動不足にならないよう、活動の時間を設けている。トイレでの姿勢にも気を配り、やや前傾姿勢で座ってもらえるよう支援し、腹部マッサージを行うことで、便秘が解消されている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた支援をしている	毎日入浴を行っており、一人ひとりの入浴の習慣や好みを把握し、個別の対応を行っている。入浴を拒む方には声がけや対応方法を全職員で考え、工夫している。身体機能に合わせ、バスボードやリフトを使用し、安全に入浴していただけるよう支援している。	入居時のアセスメントや日々の会話から、個々の入浴習慣や好みを把握し、体調に支障のない範囲で、希望どおりの入浴ができるよう努めている。羞恥心やプライバシーに配慮し、1対1の入浴介助を基本としており、希望により同性介助の対応も可能な体制である。また、入浴の拒否が見られた場合は時間を置いたり、声がけを工夫して対応している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人ひとりの生活リズムを把握し、その日の状態や希望に応じて、柔軟に休息を取り入れている。睡眠のリズムが不安定な方については、要因を探り、改善できるように支援しており、日中の活動時間が増えるように努めている。また、眠剤の服用については医師や本人、家族とも十分に相談し、慎重に対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	全入居者の薬情報をファイルし、全職員がいつでも確認できるようにしている。服薬チェック表を活用したり、一人ひとりの状態に合わせた支援を行い、服薬ミスが起きないように取り組んでいる。ミスが起きてしまった場合には対策を話し合い、更なるミスが起きないように努めている。薬による状態の経過や変化等を記録し、家族や医師にも報告・相談をその都度行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	いつまでも役割を持ちながら、楽しんで生活を続けられるように、一人ひとりに合った得意な事や好きな事を支援している。買い物代行や外出支援、事業所内でのイベントも定期的に行い、楽しみや気分転換の場を設けている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気の良い日は散歩に誘ったり、洗濯物を干す際に一緒に出かけている。行事等でも外出する機会を作り、福祉車両を活用することで、入居者の負担も軽減している。外出が楽しみになるよう、事前にポスターや口頭で行事のお知らせをしている。また、ドライブコース等は数種類の中から選んでもらっている。	近隣の散歩や利用者の希望するドライブ、買い物等、気分転換を図るために、できるだけ外出する機会を設けている。年間行事の中でも外出を計画し、担当職員が中心となって、利用者の希望を聞きながら行き先を決めている。また、移動方法や移動距離等にも配慮し、家族には前もって外出行事をお知らせし、可能な限り参加していただけるよう働きかけている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族の協力の下で少額のお金を持っていた方がいたが、物盗られ妄想が出現したことから、了承を得て、事業所で管理することになった。現在、自己管理されている入居者はいないが、家族よりお金を事業所で管理している方でも、いつでも使いたい時に使えるよう支援している。また、外出時に支払いを行ってもらう機会も設けている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話や手紙のやり取りが自由にできるよう支援している。字を書けない方には職員が代筆したり、思いを上手く伝えられないと話す方には、電話を代行している。電話の内容が他の方に聞こえないよう、居室で子機を使用し、話してもらっている。また、家族宛に年賀状を書いてもらい、好評であったため、今後も継続していく。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共用の空間が家庭的で居心地が良い場所になるよう、物品や色合いにも配慮している。また、テレビの音量や外光、温度にも配慮し、対応している。窓から見える景色や壁への飾り付けからも季節感を感じられるよう、工夫を行っている。	全体的に木材中心の造りとなっており、温もりと安らぎを感じることができる。共有のホールには食卓テーブルやソファの他、小上がりの畳スペースもあり、利用者数人がお昼寝することができる。窓からは十分な日射しがあり、陰になる部分には照明により適度な明るさを保っている他、季節を感じることができるよう、装飾も工夫している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用の空間にソファや椅子、テーブル、テレビを設置し、気の合う仲間同士や一人でも過ごせるようになっている。聞き慣れた歌謡曲や民謡、童謡等を流したり、テレビやDVDで時代劇や映画観賞を行い、思い思いに過ごせるような工夫を行っている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には入居前から愛用していた椅子やテーブル等が置かれている。家族写真や行事等で職員が手作りした物、本人が制作した物を飾り、居心地よく過ごせるよう、居室づくりを入居者と一緒に行っている。	新しい環境に早く馴染んでいただけるよう、使い慣れた物や馴染みの物を持ち込むことをお願いし、入居後も必要な物があれば、その都度、家族と連絡を取り合っている。持ち込みが少ない場合は、ホームの行事で撮った写真や手作りの作品を飾る等して、その人らしく、穏やかに暮らせるような居室づくりを支援している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設内の至る所に手すりを取り付けられ、床には段差がなく、洗面所は車椅子でも使用できる高さになっているため、できるだけ自立した生活が送れるよう支援している。入居者の混乱や失敗が見られた時には、ベッドの位置を変更したり、居室の扉には、本人の目線で見えやすい位置に名前を貼る等、工夫を行っている。		